

# 人との出会いから学ぶ

上うえ 廣ひろ 榮えい 治じ

私たちは、さまざまな活動を通して、日常的に多くの「初対面の人」に出会っています。特に入学、入社、転勤などが重なるこの季節には、たくさんの出会いがあります。私もまた、日々、多くの初見の方々に出会い続けてまいりました。そして、一つの感慨を持つに至ったのです。「人に出会うとは、新しい自分に出会うことだ」という感慨です。

思えば、私がまだ若かった頃は、初対面の人には二種類あると感じていました。私を受け入れてくれる人と、拒否する人。親しみやすい人と、よそよそしい人。気が合う人と、肌が合わない人などです。つまり出合いの瞬間に、相手に思いを注いでいけそうな人とそうでない人、さらに言えば、私にとって「いい人」と「嫌な人」、そんな二種類に分かれるように思われたのです。

そうした感想は、学生時代を通じてあったように思います。例えば、好きな先生と嫌な先生、気が合う同級生と、まるで気持ちを通い合わない同級生。それは出会った瞬間に感じたものです。そして、前者とはうまくいくが、後者に対しては妙に硬くなって何かとうまくいかない、そう思っていたのです。

今から思うと、嫌な人、苦手な人だと切り捨てた瞬間に、もうその人からは何も学ぶことができなくなつて、進歩した新しい自分と出会う機会も失われたのです。

ところが、社会に出て経験を積み、仕事などの目的をもつて数多くの人に出会うようになると、そうした思いが、しだいに希薄になつていきました。ある目的を達成するためには、好きか嫌いか、好かれているか嫌われているかなどは関係ない、そう思えるようになったのです。

例えば、床屋に行つて、店の人に好かれているかどうかはあまり関係がありません。こちらは髪を切つてもらつてサツパリすればよいだけです。しかし、相手にどう思われているかが気になつている間は、そう簡単にはいきません。自分を理解してくれているらしい人の店にしか行きたくないのです。

そんなつまらない呪縛じゆばくから、まず解き放つてくれたのが、「目的意識」です。考えてみれば、私たちが初対面の人と出会うのは、仕事であつたり、義務であつたり、遊びであつたりするのですが、いずれも何かはつきりとした目的がある場合です。そこで、「いま大切なことは何か」を、いつも考えるようになっていきました。そして、相手がどんな人であれ、余計なことを気にせず、その人と果たさなくてはならない目的の達成に、全力を尽くすようになったのです。

やがて仕事にも慣れ、心のゆとりが出てきますと、人との対面は目先の目的のためだけで終始すべきものではないことがわかつてきました。目的を達して、さらにそのうえで、相手の人間性に触れなければ、せっかくの出会いがもつたいたいと思ふようになったのです。

例えば、先ほどの床屋さんですが、床屋に行く目的は髪を切つてもらふことです。しかし、整髪してもらふ間に、相手と共通の話題が見つかり、あれこれと会話がはずみ、お互いに楽しい気分ですと時を過ごすことができたとすれば、ただ髪を切るという目的を果たしただけよりも、ずっと大きな喜びを感じるに決まっ

ています。

誰とであれ、相手の人間性に触れることによって、多かれ少なかれ何か大切なものを学んでいるのです。もし、相手が優れた人間性を有する人であれば、その人間性に触れることで、自分も大きく成長したと感じます。また、相手の人間性が崩壊しているような場合であっても、人間真実を垣間見せてくれるでしょう。ときには人生について考えさせられ、ときには反面教師にもなってくれます。

相手の人間性に触れたい、相手の人間としての真実に触れたいという思いは、私たちを確実に育ててくれます。なぜなら、そうした思いは、私たちの誰もが生まれながらに持っているものだからです。私たちは、意識するとしなやかにかかわらず、心のどこかで、常に他者に学んで、より善くなろう、より強く育とうとする向上心を働かせているのです。

しかし、その向上心は、意識的に磨かなければ、威力を発揮いたしません。学びを重ねなければ、見えるものも見えてきません。もちろん、他者の人間性に触れたいと願うようになったからといって、そこが終点ではありません。それもまた一つの出発点なのです。

私は先師をはじめとして何人もの真の実践者に会いましたが、どの方々もみな、私の学びが進めば進むほど、より大きく、より深い人間性を見せてくれたのです。それはちょうど、山の高みに登れば登るほど、眺望が開けていくのと同じです。自分自身の人間性が豊かになればなるだけ、相手の大きさや豊かさも見えてくるのです。梵鐘ぼんしょうを撞つくときに、大きな力で撞木しょうもくを打ち当てれば大きく鳴り、弱く当てれば小さく鳴るのと同じです。当方の力量に応じて、相手の姿は異なってみえるのです。

禅家に「徧界曾不蔵（へんかいかつてかくさず）」という言葉があるということを、数年前の本誌で知りました。あまねくこの世界の至るところに真実の姿が現われている。それは一瞬たりとも隠されることはない。

それに気付かないのは、お前の目が磨かれていないからだ、という意味だそうです。

人でも物でも、そこに現われているのは常に真実の姿なのです。ただ、それを見る私たちが未熟であるために見えないか、さまざまな思いにとらわれ、無用の幻影に惑わされているために、さまざまに歪み霞んで、真実とは異なった像を「見た」と思い込むだけなのです。

私たちは精進によって、迷いや思い込みなどの迷妄を払って、少しずつ真実の姿が見えるようになっていきます。人間に対する視野を広げていきます。しかし、学び伸びようとしなない者は、さらに迷妄を深くし、真実を見る視野を狭めていくのです。

そこで、私は思うのです。初対面の人に出会って、何を感じるかによって、自分がどの段階までできているかを測ることができるのではないかと。初対面の人の見え方によって、自分の成長度がわかるのです。その程度は、おおまかに言って、次の六段階に分かれそうです。

①相手が与しやすいか苦手であるかをまず考える。②その人に会った目的に集中できる。③目的を果たすだけでなく、その人の人間性に触れたいと思う。④相手の豊かな人間性に感応し、何事かを学ぶ。⑤さらに大きく感応し、目から鱗が落ちる。⑥どんな相手とも人間として共感し、何事かを学び、自分も相手によりよい感化を与えることができる。この六段階です。

この先はどうなっていくのか。正直なところ、今の私にはここまでしかわかりません。

しかし、こんなふう to 考えれば、会場での出会いや普及の折の人との出会いが大きな喜びとなり、そこから何事かを学び、新しい自分にも出会えるようになると思うのです。「二期一会」の心をもってすれば、必ず実りある出会いができるはずですよ。

とりわけ今年「もの前」の年。豊かな出会いを重ねて、来年につなげていただきたいと思います。